

「青年農業者と東北農政局との意見交換会」概要

日 時：令和2年1月15日（水） 15:00 ～ 17:30

場 所：仙台合同庁舎 A 棟

出席者

<青森県> 木村 将瑛 氏（青森県4Hクラブ連絡協議会 会長）

<岩手県> 熊谷 祐人 氏（岩手県農村青年クラブ連絡協議会 副会長）

菅原 紋子 氏（有限会社ファーム菅久 常務取締役）

<宮城県> 阿部 善光 氏（宮城県農村青少年クラブ連絡協議会 会長）

高山 真里子 氏（マリスファーム）

<秋田県> 齋藤 拓 氏（秋田県農業近代化ゼミナール連絡協議会 会長）

小松 瑞穂 氏（ふぁー夢瑞穂）

<山形県> 横沢 賢一郎 氏（山形県農業青年クラブ連絡協議会 会長）

鈴木 晃子 氏（農事組合法人麦わらぼうし）

<福島県> 鈴木 人世 氏（福島県農業青年クラブ連絡協議会 副会長）

ポンド 亜貴 氏（有限会社すとう農産 取締役）

<東北農政局> 幹部職員ほか

概 要

東北農政局は令和2年1月15日（水）に、仙台合同庁舎A棟（仙台市）において「青年農業者と東北農政局との意見交換会」を開催しました。

本意見交換会では、出席された青年農業者自身の農業経営の夢や夢の実現に向け実践していることについて意見を聞くとともに、次世代を担う農業者を育成・確保し、魅力ある地域づくりを推進していくための方策についての意見交換が行われました。



➤ 農業経営の夢、夢の実現について

はじめに各出席者から自身の経営内容などについて紹介があり、その後、農業経営の夢、夢の実現に向けての課題やその解決方法などについて各出席者から発表がありました。

齋藤 拓 氏 (秋田県)



「個人営農から地域営農にシフト。地域ブランド確立を目指す」

- ・今すぐには、実行に移す時期ではないと考えているが、近い将来、地域営農にシフトして地域ブランドを確立していく必要があると考えている。幸いにも私の地域では、若手農業者が増加傾向にあるが、個人営農、家族営農や個人ブランドでは、地域の活性化や地域に人を呼び込むことは難しい。
- ・行政には、地域をまとめる際の仲介役としてのサポート及び商品開発等で地域企業とのマッチング等のサポートをお願いしたい。

鈴木 晃子 氏 (山形県)

「他業種とのコミュニティを形成して、発展させていきたい」

- ・農家以外の業種の人とのコミュニティを地元につくり、そのコミュニティで生まれたアイデアなどを少しずつ形作っていき、発展させていきたい。
- ・また、次世代の農業者を受け入れていくために体験型農業を行っているが、一度きりの体験になってしまう人が多い。体験者に職業として農業を見てもらえるように農業の楽しさを伝えたい。



高山 真里子 氏 (宮城県)



「他業種と協力することが成功につながる」

- ・他業種の人と仕事に取り組むことで成功につながると考えている。宮城県内にとどまらず、近県にも6次化施設を設立することが目標で他業種の人と協力しながら達成したい。
- ・地域に若手や女性農業者が少ない、現在の農業スタイルを一新したいと考えている。農業が儲かるイメージを作ることで参加者を増やしていきたい。

ポンド 亜貴 氏 (福島県)

「農業を身近に感じてもらうことが、若手確保につながる」

- ・安全面を重視してオーガニック農法に取り組んでいる。
- ・私自身が小さい頃から農業に携わってきた経験から、身近に農業を感じてもらい、いかに農業と触れ合ってもらうかが大切だと考えている。
- ・農業をやりたいと思う若者は意外と多い、完全に農業に従事せずとも、半農などの就農スタイルでもいいのではないかと。



横沢 賢一郎 氏 (山形県)



「良いものを作り、自らが儲かる経営体のモデルケースとなる」

- ・農作物を作ることに専念したいと考えており、品評会で上位入賞できるような品質を目指している。
- ・30代までに経営を安定させ、自分が儲かっている経営体のモデルケースになりたい。農業は儲からないと思っている20～30代の若者に対してアピールして、若手農家が増えるきっかけとなればと考えている。

木村 将瑛 氏 (青森県)

「農業に他業種との関わりを」

- ・「農家は農家」といった従来の考え方ではなく、様々な業種の人と関わって農業をしていく必要がある。



小松 瑞穂 氏 (秋田県)



「会社を設立し、地域に雇用創出」

- ・周りの農家が高齢化でリタイアしていく中、会社を設立することで地域に雇用を創出したい。
- ・就農時、知り合いの農家は0^{ゼロ}だったが、農業女子プロジェクトやあきたアグリヴィーナスネットワークに参加して横のつながりをつくることができた。今では、グループで意見交換を実施することができている。

菅原 紋子 氏 (岩手県)

「ホップの安定供給・規模拡大とグリーンツーリズムによる地域活性化」

- ・ホップの安定供給、規模拡大を目指しており、現在、若手生産者で「しずくいしホップチャレンジ」に取り組んでいる。
- ・ホップの生産だけでなく、空き家等を活用したグリーンツーリズムにも力を入れ、地域の若い人が集まる場づくりや地域活性化につながればと考えている。
- ・行政には、法人化に向けてのアドバイスや若手が地域のために行う取り組み等の支援をお願いしたい。



阿部 善光 氏 (宮城県)



「栽培面積を現状維持して、収量の向上を図る」

- ・年間で米は 10 品種ほど、野菜は 20～30 品目ほど栽培しており、自ら売り先を見つけて北海道から沖縄まで販売している。
- ・栽培面積については、高齢化でリタイアした周辺農家から農地を借り受けることで農地集約化は達成することができた。しかし、国内の需要が減っている中、確実に販売できるかどうか分からないので、今後は生産力の向上をメインに考えて、栽培面積については現状維持して、収量の向上を目指している。

鈴木 人世 氏 (福島県)

「課題の労働力を確保して世帯収入 3000 万を実現したい」

- ・今までに栽培した品目の中から安定した収入が得られるものを残して多品種少量栽培をしている。
- ・目標の世帯収入 3000 万を実現するためには、規模を拡大していけば達成可能だと考えているが、そのためには、労働力の確保が必要となる。仕事のない時期等もあり、年間雇用が難しいのでどのように労働力を確保していくのかは課題である。



熊谷 祐人 氏 (岩手県)



「月収 100 万円を目指して、海外輸出に取り組みたい」

- ・月収 100 万円の目標達成のために安全面を売りにした、海外輸出を考えている。菌床しいたけは品種差が出にくく、差別化が難しいことや海外輸出のための安定した収量の確保等に課題がある。
- ・今後の目標として、2025 年～2030 年の間には、しいたけの輸出に取り組み、2030 年～2035 年の間に高級きのこ（トリュフ等）を栽培してブランド化を目指す。

➤ 次世代を担う農業者を育成・確保するためのアイデアや意見等について

夢の実現に向けて意見交換が行われた後で、次世代を担う農業者を育成・確保するためのアイデア等について各出席者からご意見をいただきました。

✚ 食育、学校教育の機会の重要性について

- ・現在、農業高校生の就農率は2%。農業高校生から就農者を増やしていく必要がある。
- ・農業について詳しく知らない一般の人は、種をまけば作物が育つと思っている。農業について若い世代にもっと詳しく知ってもらう必要がある。
- ・即効性のある解決策は今すぐには思い浮かばないが、食育の機会を充実させていくことが必要である。
- ・小さい頃から農業に触れ合う機会を増やしていくことが必要である。
- ・学校の代わりとなる教育の場として農業を活用できればと考える。
- ・現在、職業としての農業が特殊なものになっている。農業を普通に職業の一つとして考えてもらえる環境作りが必要である。

✚ 農業へのイメージについて

- ・農業が儲からない等のイメージを払拭しないといけない。
- ・日本の食を支える誇りを感じて欲しい。
- ・農業を若い世代にかっこいい職業としてみてほしい。

✚ 新規就農する際の課題について

- ・新規就農する際に最低限確保しなければならない農地面積の要件が高すぎるケースが見られる。
- ・地域が閉塞的で新規参入しやすい環境とはいえない。これから新規参入しやすい環境を地域で作っていく必要がある。

✚ 農林水産省に対して

- ・農林水産省の若手職員にも是非現場に足を運んでもらい、地域の農家とのつながりを作りたい。

✚ その他

- youtube 等の SNS を利用して国の補助金等の制度などをわかりやすく制度を紹介して新規就農者の手助けをしたい。
- ワーキングホリデーシステムを農家が活用して、海外の労働力を導入することなどが必要。
- メディア系の露出を多くして農業のイメージアップを図っていきたい。
- 新規就農者を増やす取組については、20～30 代の若い世代に限らず、40 代～50 代をターゲットとしてもいいのではないか。



意見交換会出席者の集合写真